る。博士の南北朝正潤論の立論の基準は、皇位の象徴たる三種神器の存否にかかつている。このような、戦前の「大義名分論」的発想に不満を感ずるのは、果して紹介者のみであろうか。

本書は多数の優秀な古文書の蒐集家でもある著者の所蔵文書をはじめ、多くの古文書を駆使して縦横の論を展開するが、光厳天皇の伝記という本書の性格もあつて所論が上層貴族階級に限られているうらみがある。著者がかつて名論文「荘民の生活」（史林八ノ一）で展開した視角、即ち庶民の生活にまで立入つた視角を本書でも援用されたならば、所論は一層の興味深さを期待し得たのではなかろうか。今一つ、気になるのは、著者が皇紀紀年を使用していることである。勿論、著者の見識によるのではあろうが、西暦紀年を使いなれた者には、換算の煩しさがあるばかりでなく、むしろ奇異にすら感ずる。多数の読者――それには多数の若者が含まれるであろうから、西暦紀年を使用するほうが親切ではなかろうか。（A5判二一六頁　昭和三十六年四月淡交新社刊　定価五〇〇円）

（石田善人）

三木与吉郎編
阿波藍譜　史話図説篇

昨年末『阿波藍譜』史話図説篇が刊行され新春早々、一読する機会をもつた。三木産業株式会社三木与吉郎氏と、三木文庫後藤捷一氏の御尽力により、『三木文庫所蔵庶民史料目録』二冊が上梓され、ついで『阿波藍譜』栽培製造篇が学界に送られたのは、まだ目新しいことであるから、相つぐ出版には関係者各位の御心労はなみなみならぬものがあつたろうと推察している。本書も既刊のそれに劣らない立派な出来栄えであり、豪華な製本、図版の鮮麗なること、また原物の手板紙を一枚宛、書物に付してある凝りようには、さすがに感歎してしまつた。

さて本書は史話図説篇とあるように藍に関する史的考察がなされ、これに付随して毎頁写真図版が挿入されている。史話という限り内容はくだいたものとなれるが、しかし平明な文章でいて、内容は非常にがつちりした研究書であり、信頼のできるものであることは断言してはばからない。筆者の自負の程もうなづけるというものであり、今後の阿波藍の研究においては必須の文献となろう。さて、内容は、藍原草、藍建発酵法、紺屋雑記と、まず藍染の基本について記され、ついで阿波藍について栽培、製法、生産額から販売状況を明らかにされ、明治以降、人造藍の移入と藍作の衰退を概観されている。もちろんこの阿波藍の展開は、蜂須賀藩の政策が問題になるが、ここでも発生から統制策が検討され藍商の組織、取引慣行、店方の内部組織まで流通面の分析がなされている。その他、他国の藍、阿波地方の逸話、民家に付属しているブチョウの構造などが記されている。附録としての統計表は、前著のそれに明治初年物産表よりの藍関係統計が付せられ、更に完備されたものとなつている。

このように本書は阿波藍のみならず広く藍についてのすぐれた概説書となつている。それなりに今少し精細に展開していただきたかつた点もないではないが、史話という以上、これも望蜀の感を免れないであろう。産業史というものは、とくに技術問題が重要であり、私など自分の研究でその弱点をよく感じるのであるが、この本はさすがに実際業務に

携ってこられた方の識見がひかつており、豊富な図解とあわせて、一々教示されるところが多かつた。また随処に民謡、文芸が入つているのも、筆者ならではの博引で、楽しみながら読ませて頂いた。

簡単な紹介では、この労作に対して申訳ないのであるが、藍についての基本的な文献をえた喜びを伝えて、一読をおすすめする。いつもながら三木産業が単に一会社の営利を超えて、「藍」産業全体についてのすぐれた書物を刊行されることに対して敬意を表するとともに、執筆に当られた後藤捷一氏が老来ますます御壮健にて、後進を稗益されんことを期待してやまない。（A5判本文二九六頁　付録統計一八八頁　三木産業株式会社刊）

（脇田　修）

沼津市誌編纂委員会編
沼津市誌　上巻

広重の「東海道五十三次続絵」に黄昏の道をいそぐ旅人の姿とともにえがかれた沼津宿は、今日岳南の工業地帯の中心として将来を期待される近代的都市に発展しつつある。その沼津市が、昭和三十年以来、この地の出身者である故後藤守一博士（明大教授）と静大教授内藤晃氏を監修者に迎え、地元の研究者によつて、六年余の才月をかけて全三巻の市誌が完成された。ここに紹介する同書上巻は、「自然環境編」（第一章　地形・地質、第二章　生物）と「歴史篇」のうちの「総説」と「各論篇」のうち「政治篇」が収められているが、本巻の大部分は、歴史的記述が中心であつて、いわば〝沼津市史〟ともいうべきものに相当する。以下、歴史的記述を中心に紹介を試みたい。

まず「総説」は、本書の中心的部分をなす「各論篇の個別的研究への導入」という役割をもたせたものであつて、所謂沼津を中心とする地域社会の歴史的発展をあとづけることを直接的目標にしたものではないが、実質的には概説の役割を果すものである。そこでは無土器文化から、先史・古代・中世・近世・及び近代現代に至る地域的発展を六章にわたつて論述している。「各論篇」第一篇「政治」では、第一章「古代国郡の変遷と沼津地方」以下、「岡野馬牧と大岡庄」「鎌倉幕府の成立と沼津」「封建制度の発展」「戦国動乱と三枚橋城」「徳川幕府の成立と代官支配」「水野氏と沼津藩」「幕末維新期の沼津」「近代の沼津―町と市―」「市法と警察」等合せて十章の個別的研究が収められている。前近代社会について、古代以来の史料的にも比較的めぐまれ、且重要な時点の諸問題を個別的に追求するという方法は、一般に史料的制約の多い地方史の記述のあり方としてはユニークなものといえるであろう。特に戦国期の後北条・今川・武田氏等の沼津を中心とする駿河・伊豆の支配関係の究明は、学界にも多大の貢献をなすものであろう。又近世の沼津藩の研究も、史料的制約を受けながら、新史料の発掘につとめられ、旧市誌の段階を大きく発展せしめていることも特筆すべきであろう。

近代以後の部分については、個別研究に分散化され、総説の部分があまりに簡略化されていることは、おしまれる。（近代については、中巻以下の教育・社会・産業・経済等の各篇参照）たしかに、今日の段階では「近代に属する一つの都市の発展を（中略）綜合的に理解すること」は「至難の業」であるにしても、それを敢て試みることは決して「市民